

ヨーロッパの情報収集の達人

# 井上勝之助

初代駐独大使

外交史家・法学博士

松村正義



【いのうえ・かつのすけ（1861～1929）とその時代】1894年日清戦争。1895年日清講和会議、下関条約。1898年井上、駐独特命全権公使。1902年日英同盟。1904年日露戦争。1914年第1次世界大戦。1915年対華二十一条要求。1919年パリ講和会議。1929年井上死去。

（写真・『世外井上公傳』第5巻（内外書籍）より）

## 朝

鮮半島および満州をめぐる対立から、1904年2月に始

まった日露戦争。その開戦直後から、日本を激しく非難するロシアの対外宣伝がヨーロッパ各国で展開されることとなった。中立的な立場にあった各国に対して、「宣戦布告前の先制攻撃は国際法に反する」といったロシア政府による戦略的な情報活動が行われたのである。こうしたロシア側の活動について、「（日本にとって）重大ノ損害ヲ及ボスノ所アリ」と指摘し、広報戦略の重要性をいち早く認識したのが、当時の駐独特命全権公使・井上勝之助であった。

## ドイツの新聞に転載された末松広報特使の記事に着目

実際に、情報収集と対外広報に関する井上の活動はひとときわ熱心なも

のであった。

開戦から4カ月経過した6月15日、朝鮮半島および遼東半島で連戦連勝を続ける日本軍の後方を脅かすかのように、ロシアのウラジオストク艦隊が対馬海峡へ躍り出て、日本の陸軍輸送船数隻を撃沈破するという事件が突発する。こうした予断を許さない戦況の中で、ヨーロッパ各国に對する広報活動のためにパリに來ていた日本政府の広報特使・末松謙澄がフランスの有力新聞『ル・タン』の記者のインタビューに応じたのだが、記者の誘導尋問に乗せられ、「両国に親交のある国が仲介に入るならば、日本はこれを拒まない」と、講和問題にまで言及してしまったのである。この発言は6月18日の同紙で報ぜられ、翌19日にはドイツの新聞『ケルニツシエ・ツアイツング』に転

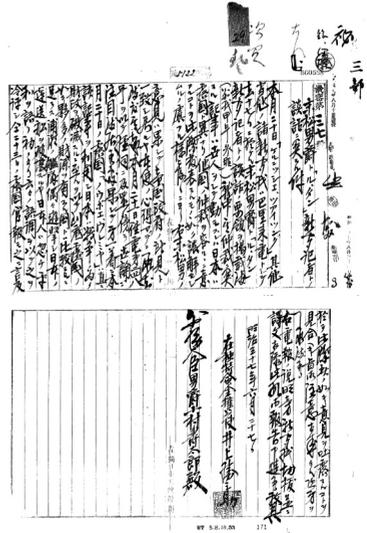
載されてしまう。これが末松にとつては不運であった。

ドイツのあらゆる新聞はもとより、ヨーロッパの主要な新聞を細大洩らさず読んでいた駐独公使・井上勝之助の目に、末松の記者会見記事が留まらないはずがなかった。井上は東京の小村寿太郎外相に電報し、「開戦後まだ4カ月というのにはやロシアとの講和問題を広報に取り上げてよいのだろうか」と照会した。その時期、講和問題に言及して敵国に弱味を見せることを極度に嫌っていた小村外相は、すぐに末松に電報し、その記事をヨーロッパの諸新聞から取り消させたのである。

### 迅速かつ確実な情報を東京へ

1年半にわたって戦われた日露戦争を通じて、当時54公館を数えたわ

が国の在外公館の中でも、とりわけ目立って迅速かつ確実な情報をしかも多量に東京へ送り続けた外交官こそ、ベルリンにいた井上であった。井上による外務本省への電信報告が最も機敏で要領を得たものであったことは一般の定説となり、ことに重要な事項をめぐってはかつて報告されなかったためしがなく、もし在独公使館から何の報告もなければ、その事件が重要でなかったことを証していた、とまで信用されていたという。また井上自身も、そのために連日連夜にわたり職務に精励恪勤したことは言うまでもない。彼は毎朝1日も欠かさず、館員の誰よりも先にその日のドイツの主な新聞すべてに目を通した。それらの論説や記事の中に本省へ報告すべきものがあれば、自ら英訳して電文を起草し、公使館



日露戦争開始から4カ月、広報特使としてヨーロッパにあった末松がフランス『ル・タン』紙の取材に応じたが、その内容が講和問題にも及んでいたため、井上の指摘から後日、取消文を各国紙に出すこととなる。本史料は、その時の経緯を記したもの。(中3枚略、外務省外交史料館所蔵)

明治新政府成立

後の1871年3

月には、11歳とい

う若さで大蔵省か

ら選ばれて海外留

学を命ぜられ、ロ

ンドンへ渡航。3

年ほどの勉学の後、

1873年12月に

帰国した。5年後

の会計局兼庶務局に勤務した。

下関での日清講和会議で

英語通訳として活躍

外務省に入省した翌年の3月には、

条約改正係を命ぜられて井上馨を秘

書官のように補佐したが、1886

年2月に外務書記官に任ぜられ、在

独公使館へ赴任する。6年間ベルリ

ンにあつて品川弥二郎、西園寺公望

の両公使の下で働き、1892年に

帰朝。外務省参事官に任ぜられ、2

年後の1894年8月に勃発した日

清戦争では、翌年3月〜4月に下関

で開催された日清講和会議で両国全

権間の正式交渉語となった英語の通

訳者として活躍した。

ドイツから有益な情報を多数送る

そして弁理公使の職を経て、18

へ行って館員に手渡し、打電させて

いたという。ちなみに、当時のわが

国の外務省では、外国の電信会社と

の契約で、在外公館との電信文は暗

号電文も含めて英文で行われていた。

## 大蔵省勤務から外務省へ

井上勝之助は、1861年7月11

日に長州藩周防山口の湯田村で長州

藩士井上光遠の次男として生まれた。

の1878年に叔父である井上馨の

養嗣子となり、1880年に20歳で

大蔵省に入省、翌年には同省御用係

となった。同省の商務局や銀行局に

勤務し、1883年1月に山縣有朋

の媒酌で小澤末子と結婚した。同年

12月には大蔵省権少書記官に任ぜら

れ、翌年6月に大蔵省の調査課長と

なったが、同年10月に外務省権少書

記官も兼任するようになり、外務省

98年2月には特命全権公使に任せられ、社交的で才色兼備の末子夫人を伴い、再びドイツへ赴任する。その6年後の1904年に日露戦争が勃発するや、井上の活躍は目覚ましかった。ドイツ語圏への対外広報については、ベルリンに在住させたお雇い外国人のアレキサンダー・シーボルトを使って活動させるかたわら、

彼自身もドイツを中心としたヨーロッパの情報の収集とそれらの本省への報告に専念した。実際にも日露戦争開戦直後の2月15日には、小村外相から井上のいる在独公使館をヨーロッパの新聞用の情報基地とする旨の決定がなされており、シーボルトの存在とともに有益な情報を数多く本省へ送った井上の実績が高く評価されていたことがうかがえる。

在任中の井上は、任国のドイツ語

を十分理解しながらも、ドイツ政府との交渉には決してドイツ語を使用せず、すべて英語で行ったという。ドイツ語で交渉を行えば、折衝相手のドイツ人には有利になってしまふ。だが、相互に母国語でない英語を使用すれば平等の立場で交渉できるというのが、井上の考えであった。もって範とすべきであろう。

## 初代の駐ドイツ大使に

日露戦争終結後の1906年1月、在独公使館の大使館昇格に伴って、井上自身も初代の駐独特命全権大使に任命された。井上は、同年11月にはその任を解かれ帰朝したが、ヨーロッパにおける井上の活躍をたたえ、翌1907年2月に財界の大御所・渋沢栄一らが明治座で盛大な歓迎会を催したほどであった。

その後は、1913年2月に再び特命全権大使として英国へ赴任する。翌年7月に勃発した第1次世界大戦では、対華二十一箇条要求問題や日本の参戦問題などをめぐり、困難な英国との交渉に当たった。1916年6月に帰朝し、枢密顧問官などを務め、1929年1月に死去。享年69歳であった。

【参考文献】井上馨侯伝記編纂会編「付録 侯爵井上勝之助君略伝」「世外井上公傳」第5巻（内外書籍）／松村正義「ポーツマスへの道―黄禍論とヨーロッパの末松謙澄」（原書房）／同「日露戦争と日本在外公館の外国新聞採縦」(成文社)

松村正義 まつむらまさよし  
1928年福井県生まれ。東京大学法学部卒。1952年外務省入省。1970年ニューヨーク領事。1975年国際交流基金勤務。1979年法学博士。1985年コロンビア大学東アジア研究所客員研究員。1988年帝京大学教授。2003年日露戦争研究会会長。主な著書に『日露戦争と金子堅太郎―広報外交の研究―』（新有堂）『ポーツマスへの道―黄禍論とヨーロッパの末松謙澄』（原書房）、『新版 国際交流史―近代日本の広報文化外交と民間交流―』（地人館）、『日露戦争100年―新しい発見を求めて―』（成文社）他、論文も多数。

### 外務省外交史料館

〒106-0041 東京都港区麻布台1-5-3

TEL：03-3585-4511

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/>

※松村先生の連載は今号で最終回です。

松村先生、ありがとうございました(編)。